

# 声の高さから受ける印象について

大 原 由美子

二か国語以上話すことができる話者の会話を聞いていて、各言語の持つ印象の違いに驚くことがある。話者の話す言語によって、聞き手が受けるイメージが異なるのである。ある人が英語を話すのを聞いて受けるイメージは、「積極性」なのに、同じ人が日本語を話すとき受ける印象は、全く違ったものの、例えば、「礼儀正しさ」だったりする。はたして、話し言葉から受けるこのようなイメージは、言語学的に分析できるのだろうか。「積極的」、「礼儀正しい」というような印象は、語彙や、音声に、どのように表われるのだろうか。以上のような疑問に、何らかの答えを見いだそうとしたものが、大原（1993）である。それにおいて、社会言語学と音響音声学に接点をもたせ、日本語を第一言語とする女性の話し手は、日本語を話す時に、英語を話す時に比べて、非常に高い声を使用する事がわかった。その理由として、「女性は女性らしく」という日本語文化による抑制をあげたわけだが、本稿においては、声の高さから受ける印象に焦点をあてたいと思う。声の高さの持つ社会的意味がわかってくれば、なぜ日本人の女性が日本語を話す時に、英語を話す時よりも高い声を使用するのかも、わかって来るのではないだろうか。

## 従来の研究

今までにも声の特徴とその意味について、いくつかの研究が行われてきた。Aronovitch（1976）は、音声的特徴に基づいて性格が判断される傾向があることを実証しようとした。この研究では、大学生57名の声を他の学生 100人に聞かせた結果、学生たちが声のステレオタイプをもとに、性格判断を行っているという結果が出た。（発話速度、音量、振動数等が分析の対象になった。）また、厳密には声だけの問題ではないが、仮装対応実験－matched guise test－をもとに、言語に基づくステレオタイプと性格判断の関係を明らかにしようとした Lambert 他（1960）の研究もある。この仮装対応実

験では同一人物が英語とフランス語を使って、内容の同等な文を読んだものを他の被験者に聞かせたところ、フランス語で読んだ場合の方が否定的な性格判断が与えられたというものである。さらに、Labov 他(1968)は音韻の差異による聞き手の反応を、研究するため主観的評価テスト-subjective evaluation tests-を考案した。この実験で、被験者は録音された発話を聞いて職業適応性スケール(アナウンサー-学校の先生-部長-セールスマン-郵便局員-工場、工事現場の監督-工員)を基準に評価するよう指示された。これらの職業は、実験者によって、社会的地位の高いものから低いものの順に並べられている。しかし、Labov 他も指摘しているように、このスケールを被験者が実際に、社会的地位の高いものから順番に表わしたものと、見なしたかどうかは問題である。本稿においては、Lambert 他と Lambert (1967) で使われた仮装対応の概念と Labov の職業適応スケールを組み合わせた実験を行った。

## 実験方法

録音はハワイ大学マノア校の音声研究室で、ソニー C F S - W304 と Key Elemetric Corp. Model 5500を使って行った。丁寧に差異を持たせないため文は、挨拶の“今日は”、“今晚は”、“さようなら”にした。録音したテープの話者は、ハワイ大学言語学部修士課程在学中の東京出身の女性二人、28歳と33歳である。二人の話者(YとM)が同じ文を、周波数だけ200、250、300ヘルツと変えて発話した<sup>注1</sup>。使用した文は、全部で18であった。被験者は、全員、ハワイ大学のHawaii English Language Program の日本人学生で、女性14人(18-28歳、平均22.1歳)男性9人(18-33歳、平均23.4歳)であった。英語の能力は全員Comprehensive English Language Test により中級と見なされていた。アメリカ居住期間は女性が二週間から五年、男性が二週間から二年であった。被験者は、(1)職業適正スケール、(2)「三高」(学歴、収入、身長ともに高い)の男性と結婚する確率、(3)婚期が遅れる確率、(4)年齢の四点についてテープの声を評価し、そのあと質問(1)の職業の「女らしさ」について評価するよう指示された。

## 実験結果

表1は女性被験者と男性被験者の、質問5に対する答えをまとめたものである。質問5の内容は、“次の職業に一番女らしいものから順に、8から1の番号を書いて下さい”で、職業は、「受付、会社員、外科医、政治家、秘書、弁護士、幼稚園の先生、大学教授」であった。数値が高いほど「女らしさ」が高いことになる。この質問は、実際には一番最後に聞いたものであるが、議論上最初に考えてみる必要がある。職業の「女らしさ」の順位について男女とも同じ結果が得られた。

表1 職業の「女らしさ」

	女性被験者	男性被験者
1. 幼稚園の先生	6.86 <sup>注2</sup>	7.22
2. 受け	6.79	6.56
3. 秘書	6.43	6.33
6. 事務員	4.29	4.67
5. 医者	3.93	3.67
6. 教授	3.21	3.00
7. 弁護士	3.07	2.67
8. 政治家	1.43	1.78

Lobov 他(1968)の職業適応性スケールのを補修するため、質問5、職業の「女らしさ」の結果を、このスケールに取り入れた。被験者の各職業にたいする主観的な社会的位置付けに基づいて、スケールを構成したのである。被験者は各文を聞いて、質問に答えた。質問1の内容は“この人が就くことができる最高の職業はどれだと思いますか”であった。質問1に対する答えは表2に示した。下記の表のY200は、話者Yが200ヘルツの平均周波数で発話したことを表わしている。それぞれの声に相当だと思われる職業は表1を参考にして見る。例えば、Y200の数値は2.83だから、表1から言えばおよそ弁護士の数値に近い。ゆえにこの声は弁護士にふさわしい高さだと被験者に思われたということが言える。女性被験者と男性被験者の答えの類似点に注目してほしい。

表2 職業適応性

女性被験者				男性被験者			
Y200	2.83	M200	3.95	Y200	2.96	M200	3.67
Y250	4.14	M250	5.74	Y250	4.20	M250	5.67
Y300	4.76	M300	6.87	Y300	5.67	M300	7.19

質問2では「三高」のひと結婚する確率を聞き、非常に高い(5)、高い(4)、まあまあ(3)、低い(2)、非常に低い(1)の中から記入するようにした。ゆえに、数値が高いほど確率が高くなる。表3は質問2に対する答えをまとめたものである。女性被験者の結果を除き、ピッチが高いほど「三高」と結婚する確率が高いと思われるという結果がでた。

表3 「三高」と結婚する確立

女性被験者				男性被験者			
Y200	2.95	M200	3.05	Y200	2.27	M200	2.57
Y250	3.17	M250	2.86	Y250	2.53	M250	3.07
Y300	3.02	M300	3.21	Y300	2.70	M300	3.30

表4は質問3に対する答えを表わしたものである。質問3は、婚期が遅くなる確率について、非常に高い(5)、高い(4)、まあまあ(3)、低い(2)、非常に低い(1)の中から答えるように指示したものである。ピッチが高いほど、婚期が遅くなる確率が低いというイメージを受けることがわかった。

表4 婚期が遅くなる確率

女性被験者				男性被験者			
Y200	3.57	M200	3.36	Y200	3.70	M200	3.47
Y250	3.47	M250	2.43	Y250	3.57	M250	2.10
Y300	3.24	M300	1.67	Y300	3.00	M300	1.60

質問4は、“年齢はどのぐらいだと思いますか”であった。被験者は答えを、20歳未満(1)、20-24歳(2)、25-29歳(3)、30-35(4)、35歳以

上（５）の中からえらんだ。数値が高いほど、声が若く思われたことを示している。例えば、女性被験者のM 200の数値、3.62は25－29歳と30－34歳の中間点より少し上なので、だいたい31歳ぐらいだと言える。結果は表５にまとめてある。声が高いほど若く思われる傾向が明らかになった。

表５ 年 齢

女 性 被 験 者				男 性 被 験 者			
Y 200	4.12	M200	3.62	Y 200	3.89	M200	3.48
Y 250	3.68	M250	2.36	Y 250	3.14	M250	2.15
Y 300	3.62	M300	1.83	Y 300	2.95	M300	1.52

## 考 察

イントネーションにおける社会的意味については、既にCristal (1987)、Ladd (1978)、McConnell-Ginet (1978)、Uldall (1964)が検証している。本稿においては、声の高さの社会的意味について探ろうとした。実験結果から、声の高さにも社会的な意味があることがわかった。声のピッチが高いほど、その声の持ち主は、「女らしい」と思われる職業に向いていて、「三高」の人と結婚する確率が高く、婚期が遅くなる確率が低く、年齢は若く思われるという結果が出た。しかし、もちろん、声の高さの意味は、上記のものに限られるわけではなく、多数ある。自信がある・ない、感情的・非感情的、外向的・内向的、支配的・従順、丁寧・無作法等の点について今後研究を進めたい。

注1. モデル5500の音響スペクトログラムを使用し、声の高さ以外の特性・音の強さ、長さ等を、一定に保ちながら声の高さだけを、変えるようにした。

注2. 数値はすべて平均値を表わしている。

注3. 他の質問の結果からも明らかのように、声から受けるイメージは、声の高さだけによるものではない。音量等多数の要因が考えられる。ピッチ以外の要因も今後の課題にしたい。

注4. 質問2の女性被験者の答えだけが、この傾向を示さなかった。Yのスピーチの「三高」の人と結婚する確率は、高い順に 250、300、200、M

は300、200、250であった。「三高」の人と結婚する確率の印象については、声の高さだけではなく、他の要因（音量、発話速度、強度等）の関連が強いものと思われる。

## 参考文献

- Aronovitch, Charles D. 1976. "The Voice of Personality : Stereotyped Judgments and their Relation to Voice of Quality and Sex of Speakers," *Journal of Social Psychology* 99:207-20.
- Cristal, David. 1987. The Cambridge Encyclopedia of Language. Cambridge: Cambridge University Press.
- Labov, William, Paul Cohen, Clarence Robins and John Lewis, 1968. A Study of the Non-standard English of Negro and Puerto Ricans Speakers in New York City. vol.1 and 2. NY : Columbia University Press.
- Ladd, Robert. 1978. The Structure of Intonational Meaning: Evidence from English. Bloomington : Indiana University Press.
- Lambert, Wallace E. 1967. "A Social Psychology of Bilingualism," in John Macnamara, (ed.) *Problems of Bilingualism*. The Journal of Social Issues 23, 2:91-109.
- Lambert, Wallace E., R. C. Hodgson, R. C. Gardner, and S Fillenbaum 1960. "Evaluation Reactions to Spoken Languages," *Journal of Abnormal and Social Psychology* 60:44-51.
- McConnell-Ginet, Sally. 1978. "Intonation in a Man's World," *Signs*. 3:541-559.
- 大原由美子1993. "「女ことば」のピッチ" *日本語学* 5月臨時増刊号12:141-47.
- Uldall, Elizabeth. 1964. "Dimensions of Meaning in Intonation," in D. Abercrombie, D. E. Fry, P. A. D. MacCarthy, N. C. Scott and J. L. M. Trim (eds.) In Honour of Daniel Jones. London: University Press.

(ハワイ大学大学院)